

特別な内斜視の鑑別

	両外転神経麻痺	開散麻痺	非調節性輻湊過多型内斜視	先天(本態性乳児)内斜視	眼振阻止症候群
第一眼位	<p>遠方 内斜視</p> <p>近方 内斜視</p> <p>完全麻痺の場合 麻痺の少ない方の眼で固視</p>	<p>遠方 内斜視</p> <p>近方 ほぼ正位</p>	<p>遠方 内斜位又は正位</p> <p>近方 内斜視</p> <p>場合によっては遠方が斜視の場合もあるが、近方より少ない</p>	<p>遠方 内斜視</p> <p>近方 内斜視</p>	<p>遠方 内斜視</p> <p>近方 内斜視</p> <p>両眼内斜のまま固視眼側に顔向け又は非固視眼が固視眼分2倍内斜</p>
むき運動	両外転制限あり	外転制限なし(合併がないなら) 両眼視良好なので抑制をかける交差固視はないでしょう。	外転制限なし(正常) 両眼視良好なので抑制をかける交差固視はないでしょう。	見かけ上の両外転制限あり(正常)	見かけ上の両外転制限あり(正常)
ひき運動	両外転制限あり	外転制限なし(正常)	外転制限なし(正常)	外転制限なし(正常)	外転制限なし(正常)だが、固視眼が外転すると眼振が出る
複視	新鮮な場合、同側性複視(遠方で増加するが開散麻痺ほどではない)	遠方 同側性複視 近方 通常ない (正位の時があり両眼視良好なので遠方のみ複視あり)	遠方 通常ない 近方 同側性複視 (正位の時があり両眼視良好なので近方のみ複視あり)	両眼視機能が不良なので通常なし(交差固視するため通常視力は良好)	通常ない(交差固視することとは片眼抑制)
頭位異常	通常不全麻痺や麻痺の程度に差がある場合はなし 完全麻痺なら固視する側に顔向け	通常なし	通常なし	通常なし	固視眼側に顔向け(輻湊眼位や固視眼の内転で軽減するので、輻湊した固視眼で前方を見るため)
臨床所見	両眼とも輻湊眼位をとることが多く、両眼とも外転できない 頭部外傷の場合が多く、複視を自覚する 複像間距離は注視方向による差がある 早期発症の場合は交差固視となり両眼視不良	輻湊した位置から開散できず、遠見で著明で近見で消失あるいは軽減する 内斜視が突発し、同側性複視を訴える 複像間距離は注視方向による差はない	過剰な近接性輻湊による内斜視で、近見斜視角が遠見斜視角より大きい(視能学より)	斜視角は30度以上と大きい 交代性上斜位、潜伏眼振、顕性潜伏眼振、下斜筋過動症を伴うことが多く、その場合は内斜視角が変動する 見かけ上の外転障害、内転過剰、斜筋異常を示すことが多い 斜視弱視の合併が多い(視能学より)	乳幼児期に急激な大斜視角の内斜視が発症 両眼ともしばしば内転する 内斜視が増加すると眼振が減少する 内転位では両眼とも眼振は起こらない 眼球を外転方向に向かせるに従って眼振の振幅増大 交差固視(視能学より)
ヘスチャート	両眼とも外転制限があるので、内転方向のチャートが大きくなる オーバーアクションとなる	両眼とも外転制限がないので、内転方向のチャートは同じ(位置は内斜でも正位でもOK) 通常の共同性内斜視又はほぼ正位の図となる	通常の共同性内斜視	乳児でありかつ両眼視不良で検査不可能	眼振が出るとはつきりせず、交差固視すると両眼視不良で検査不可能